



行事紹介

○節句

節句とは、季節の移ろいを祝いつつ、命の尊さや自然の営みを見つめ直す貴重な機会です。古くは暦に従い、自然の恵みに感謝し、日々の雑事から一時離れて心を清める儀式として行われてまいりました。仏教においては、すべては常に変化し、変わらないものはなく、その無常の真理「諸行無常」の教えを悟ることが大切と説かれています。節句は、この仏教的な無常観を、身近な行事という形で私たちに示し、心の在り方を問い直すものなのです。たとえば、春の花見、夏の盂蘭盆会、秋の彼岸、冬の迎春といった節目は、古くから自然の榮枯盛衰を感じながら、祖先への感謝の念を込めて行ってきた行事です。これらの行事を通して、私たちは自らの内面を見つめ直し、煩惱や迷いを払い、心に静けさと平和を取り戻す機会でもあります。また、節句は単なる伝統行事としてだけでなく、家族や地域との絆を再確認し、季節の変わり目に心を整えりセットする大切な時間という側面もごさいます。忙しい現代社会において、節句はふと立ち止まり、自然の摂理を再確認し、心の調和を取り戻すための貴重な機会と捉えることもできます。すなわち、節句は世の中の変化を認識し、自然の理を理解して日常に生かし、私たち一人ひとりが感謝と謙虚さを学ぶ場ともいえるのです。

今月のことば

善悪は地獄極楽

人の心の善意が地獄の苦や極楽の楽をこの世に現出させるので、決して死後だけに地獄や極楽があるわけではないという戒め。相手の態度もこちらのし向け次第で、鬼にも仏にもなるとされています。人間の心は万物を映し出す鏡のようなもので、心に善を抱けば喜びや平和が広がり悪を宿せば悪意や憎しみが生じるでしょう。心の善悪によって、日々の生活が決まるのです。日々の生活において、自分の心が善悪のどちらの方向へ向かっているのか見つめなおすことも大切です。

世界の仏教

仏教は多くの国々で信仰されていますが、仏教を国教としている国は、タイ・カンボジア・ブータンなどが挙げられます。今回は仏教国であるタイの紹介です。タイでは上座部仏教が主流となっています。上座部仏教は、出家し修行を積むことで悟りを開くことができると説かれています。タイには約三万の寺院があると言われており、信仰の場としてだけでなく地元での交流の場となっています。タイには伝統行事も多く中でもソンクラーン（水かけ祭り）は有名で多くの観光客が訪れます。もともとは、仏像に水をかけお清めをするという風習でしたが、近年はそれが転じて水を掛けあう「水かけ祭り」として知られるようになりました。また、水かけ祭りと音楽フェスを融合したイベントもあり、世界中からたくさんの人々が集まります。今年も四月十三日～十五日に開催されました。仏教行事と聞くと堅苦しいと感じる方もいるかと思いますが、気軽に参加できるものもあります。タイではまた違った仏教行事を体験できるかもしれませんね。

はじめての仏教

○苦行に挑むお釈迦様

故郷の城を出て出家を果たしたお釈迦様は、髪を剃り、最低限の荷物のみを持って修行の旅に出ました。旅に出て七日目にマガダ国の王舎城を訪れ、その王であるビンピサーラ王に出家を思いとどまるよう勧められますが、これを断ります。その後二人の高名な仙人に師事し、一人の師のもとで「無所有処」（煩惱を滅し何ものにもとらわれない境地）、もう一人の師のもとで「非想非非想処」（想うこともなく、想わないこともない境地）に達しましたが、どれも煩惱を救った真の悟りを得るものではないと覚りました。

次の修行地でお釈迦様が志したのは、肉体を痛めつける苦行でした。当時のインドにあったバラモン教に基づく修行で、「息を止め続ける」「片足で立ち続ける」「食べ物何日も食べない」などがあります。お釈迦様は同行していた五人とともにその後六年間に渡り苦行を行います。しかし、苦行はいたずらに心身を消耗するだけで悟りを得られるものではないと覚りました。

苦行を捨て、やせ細った身体を休めるためにナランジャーナ川で沐浴をしていたお釈迦様は、スジャータという村娘から乳粥を施されます。これにより心身を癒されたお釈迦様は、ガヤーの町の郊外にある菩提樹の下で坐禅を組みます。極端な快楽からも、極端な苦行からも離れ、「悟りを得るまでは決してこの座を立たない」というかたい決意の下、瞑想によって真理を求めました。